

# 引き継がれた墓制

## —近畿北部型弥生時代後期墓制前史—

肥後 弘幸

### 1. はじめに

近畿中央部において、拠点集落と呼ばれる大形集落の多くが継続しない状況や、盛んに営まれた方形周溝墓が激減してしまう状況など、弥生時代中期末から後期にかけての不連続が認められる。近畿北部においても、春日七日市遺跡、舞鶴市志高遺跡、京丹後市途中ヶ丘遺跡、同奈具岡遺跡などの拠点集落でも同様に後期初頭の遺構が減少する傾向にある。

一方、この地域では、中期末から後期初頭にかけて突然個性あふれる墓制が誕生する。その特徴は、1)集落から離れた丘陵上に墓域を設定し、墳丘区画の明瞭でない台状墓を築くこと。2)墳頂部に大小の埋葬施設があり、家族墓的な性格が予想されること。3)墓壙内破碎土器供献と呼称する独特な土器供献儀礼を行うこと。4)しばしば、鉄製の武器・工具類及び石製・ガラス製の玉類を副葬することである。筆者は前稿でこの墓制を近畿北部型弥生時代後期墓制と呼称し(以下本論では「後期の墓制」と略称する)、その伝統と変革について述べた。<sup>(注1)</sup>

後期の墓制は、現状では京丹後市三坂神社3号墓で完成した形で出現し、強い規制のもと近畿北部に広がっていく様相にある。その範囲は、丹後半島部を中心とした丹後地域、円山河流域を中心とした但馬地域そして由良川中流域及び加古川上流域を中心とした丹波地域(南丹波を除く)である。この墓制が他地域の影響を強く受けて成立したことも考えられるが、ここではこれらの地域の前史の墓制を検討することで、その成立に関するヒントを得たいと考えるところである。

### 2. 異なる墓制の分布

近畿北部型弥生時代後期墓制が、分布する地域には、弥生時代前期から中期にかけて、方形台状墓、方形周溝墓、円形周溝墓、方形貼石墓などが認められる。

#### (1) 方形台状墓

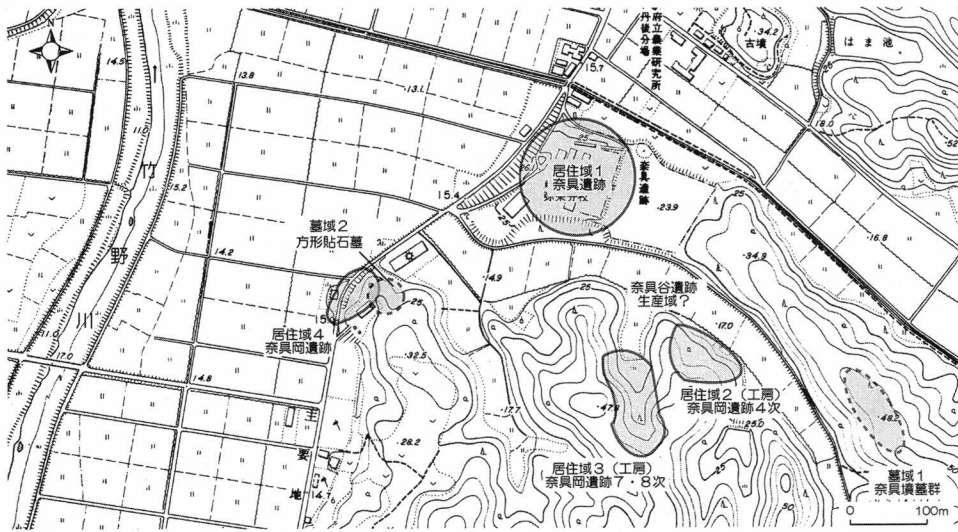
丘陵上に主に地山を整形して築かれたもので、前期末の京丹後市七尾遺跡、中期前葉の同豊谷墳墓群、中期後葉の同奈具墳墓群などがある。<sup>(注2)</sup>主に丹後半島部に分布する。



第1図 近畿北部の弥生時代墳墓の分布（前期～後期）

七尾遺跡は、前期末に築かれた大規模な環濠をもつ扇谷遺跡に谷を挟んで150mの距離、平地との比高差28mの丘陵上に位置する2基の台状墓である。室町時代に宝篋印塔及び石塔設置に伴い改変を受けている。台状墓Ⅰは、方形で一辺10m、高さ0.8～1mを測り、土坑3基が検出された。土坑Ⅰは、長方形で幅1.0m、長さ1.8m、深さ0.6mを測り木棺を納めたことが想定されている。不整形な土坑Ⅱ、土坑Ⅲについては、報告書では埋葬施設とされているが、形状・規模などから埋葬施設とは考えにくい。台状墓Ⅱは、隅丸方形で一辺10m、高さ1.0mを測る。土坑2基とピット2基が検出された。土坑Ⅰは、長方形の2段墓壙で、上段は長辺2.5m、短辺1.7m、深さ0.25m、下段は長辺2.1m、短辺0.9m、深さ0.08mを測り、木棺を納めたことが想定されている。不整形な土坑Ⅱは、報告書では埋葬施設とされているが不明な点が多い。ピット2からは、底部を一部欠いた高さ43.8cmの前期末の壺形土器が出土している。

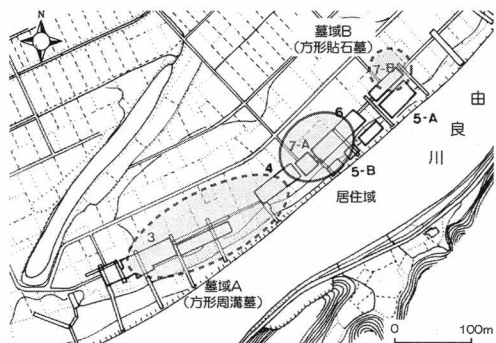
豊谷墳墓群は、佐野谷川中流域左岸の平地との比高差約30mの丘陵上に位置する2基の台状墓である。眼下北側1kmの距離に中期の女布遺跡が存在する。1号墓は丘陵頂部の堤



第2図 奈具・奈具岡遺跡群の居住域と墓域（弥生時代中期後半）

谷A 1号墳の墳丘斜面下層に位置し、墳形は不明である。埋葬施設は1基で、長辺2.1m、短辺1.5m、深さ0.7mを測る。墓壇内には長辺1.9m、短辺1.1mの木棺を納めている。墓壇内からは、石鏃および石鏃片22点が、墓壇上からは半截された石剣が出土した。石鏃は、先端片のみの存在、2片に割れていたものの存在などから、埋葬者に刺さっていた可能性と折損させたものを供献した可能性が考えられる。2号墓は1号墓から平野側40mに位置する。上層には平安時代末期から鎌倉時代の経筒埋納遺構群がある。丘陵側の幅1.5m、深さ0.8mの尾根を切断する溝と平野側の幅0.4m、深さ0.4mの墓壇を囲む溝により区画された一辺5m規模の台状墓である。埋葬施設は1基で、長辺2.6m、短辺1.8m、深さ0.7mを測る。墓壇内には長辺1.8m、短辺1.1m程度の木棺痕跡が確認されている。墳丘上及び溝内から中期前葉の弥生土器小片が出土している。

奈具墳墓群は、竹野川中流域右岸の標高48mの丘陵上に位置する。奈具墳墓群は、奈具遺跡(居住域)、奈具谷遺跡(居住域、生産域)、奈具岡遺跡(居住域兼工房跡・墓域)とともに、奈具・奈具岡遺跡群として評価される一つの拠点的な集落遺跡である(第2図)。1～3号墓はほぼ同規模の長方形の墳墓である。溝は尾根線を区切るもの以外に斜面にもあり、方形周溝墓との区別が付きにくい。墳丘規模は1号墓が長辺21.2m、短辺10.7m、高さ1.5mを、2号墓が長辺20.0m、短辺9.7m、高さ1.5mを、3号墓が長辺15.8m、短辺9.3m、高さ1.1mをそれぞれ測る。埋葬施設は、いずれも木棺墓で、1号墓が7基、2号墓が7基、3号墓が2基である。埋葬施設の規模は、ほぼ同規模で、墓壇規模が長辺1.7～2.9m、短辺0.7～2.2m、深さ0.3～1.3mを、木棺規模で長辺1.3～2.0m、短辺0.5～0.7mを測る。多くの埋葬施設が墳丘と同一方向に配置されているが、1号墓と2号墓の各1基が墳丘方向に



第3図 舞鶴市志高遺跡の居住域と墓域(中期後半)

直交している。墓壙内棺外に甕や壺を細かく破碎して供献している例が1号墓で2例、2号墓で3例ある。後期の墓壙内破碎土器供献の原形と考えられる。また、墳丘斜面や溝内からも土器が出土している。中期後葉に位置づけられる。なお、3基の台状墓に隣接して2基の方形周溝墓と区画の不明な2基の木棺墓がある。

## (2) 方形周溝墓

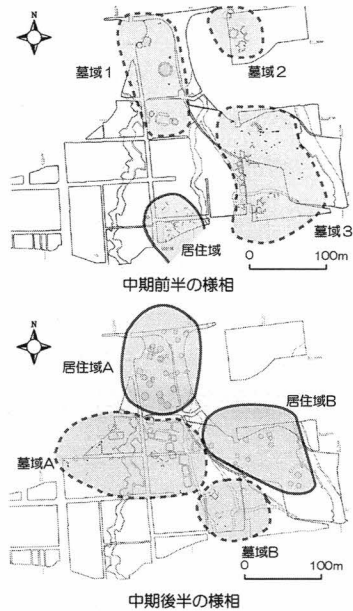
近畿地方を中心に広く分布する方形周溝墓は、近畿北部では由良川流域を中心に多く分布する<sup>(注3)</sup>。丹後半島部では後述する貼石墓とともに検出されている。ここでは、丘陵上に立地する豊岡市駄坂舟隠遺跡、舞鶴市志高遺跡、丹波市七日市遺跡をとりあげる。

駄坂舟隠遺跡は、円山川右岸平野部との比高差約35mの丘陵上に位置する。東方200mの眼下に弥生時代前期～中期にかけての貝塚を伴う駄坂河原遺跡が存在する。前期古墳群の築造と山城の造作のために改変が著しいが、9基以上の方形周溝墓が確認されている。直径26mを測る2号墳の下層からは接続する6基以上の方形周溝墓が検出されており、本来はなだらかな丘陵頂部約30mの間に一辺7、8mの方形周溝墓が10～20基程度あったとされている。2号墳下層の11号墓は最も大きな方形周溝墓で長辺が11m、短辺が7.3mを測る。周溝は幅0.7m、底幅0.3mを測り、逆台形を呈する。埋葬施設は墳丘中央の1基で、長辺2.15m、短辺1.05m、深さ0.95mを、木棺規模は長辺1.6m、幅0.4mを測る。11号墓に接続する13号墓の埋葬施設の棺内小口付近から緑色凝灰岩製の管玉125点以上と先端を欠いた石鏃1点が出土している。9号墳下層墓の埋葬施設内からは、打製石鏃5点、磨製石鏃2点及び剥片1点が出土している。石鏃はいずれも先端や逆刺を欠いたものである。このほか、14号墓埋葬施設、4号墓第1主体からも石鏃1点が出土している。これらの石鏃の出土状況は豊谷2号墓例との共通性が高い。なお、周溝内から壺、甕が出土しており、前期末から中期前葉に位置づけられる。

志高遺跡は由良川の下流域左岸自然堤防上に位置する拠点的な集落である。延長450mに及ぶ弥生時代中期後半の遺構群は、西から方形周溝墓群からなる墓域A、大溝を境に居住域、自然河川、貼石墓からなる墓域Bという構成で並ぶ(第3図)。総延長250mの墓域Aは西地区(昭和57年調査区)と東地区(昭和58年調査区)とに大別される。中期後葉の遺物が出土した東地区は多数の方形周溝墓に伴う溝と土坑が交錯しており様相を把握しにくい。西地区では、約30基の方形周溝墓が検出された。一辺5～10m程度のものが大半を占

めるが、15m程度の大型に復原されるものもある。方形周溝墓2は、長辺8m、短辺7mの長方形で、周囲に幅1m深さ0.5mの溝が巡り、北西及び南東隅部に陸橋部がある。墳丘中央部の埋葬施設は長辺2m、幅1m、深さ0.6mを測り木棺を納めていたと推定されている。周溝内の北東隅部には溝内埋葬施設がある。周溝内から供献された中期中葉の壺2点が出土している。方形周溝墓2をはじめ、約半数の周溝墓で埋葬施設が墳丘上に1基検出され、11基の周溝墓から中期中葉の土器が出土した。

七日市遺跡は由良川上流部の竹田川左岸の低位段丘上に位置する拠点的な集落である。弥生時代中期の遺跡の規模は東西約400m・南北約500mを測り、約6万㎡が調査された。中期後半は、中期前半から居住域が大きく移動し、調査区内には二つの居住域と二つの墓域が形成さ



第4図 春日町七日市遺跡

れている(第4図)。中期後葉になると中期中葉に方形周溝墓や円形周溝墓が築かれた地域(墓域1)に居住域が集中しはじめ(居住域A)、これに合わせて墓域が南へ移動する(墓域A)。東側の微高地の上では、方形周溝墓を避けるように住居が築かれるようになる(居住域B)。円形周溝墓6基を含む計56基の中期の周溝墓の内、12基で墳丘内に埋葬施設が検出されている。溝内に埋葬施設をもつ周溝墓も存在する。墓域2では、墳丘上に複数の埋葬施設をもつ中期中葉の方形周溝墓が3基検出されている。この内、SX02は、南北11m・東西11m(周溝部を含む)を測り、墳丘内から壺棺1基を含む4基の埋葬施設が、周溝内から4基の埋葬施設が検出された。墓域内の木棺は1.4~1.7m、幅0.7mを測る。墓域BのL地区SX02は、東西6.5m・南北7.3m規模の方形周溝墓で、墳丘内から小児木棺と壺棺を含む3基の埋葬施設が検出されている。なお、このほかの8基の周溝墓は、墳丘中央部に1基のみ埋葬施設をもつ。

### (3) 円形周溝墓

近畿地方では、中期以前の円形周溝墓は播磨や西摂津を中心に分布し、近畿北部においては、丹波市七日市遺跡、養父市米里遺跡などに例がある。

七日市遺跡では、6基の円形周溝墓が検出された<sup>(注4)</sup>。遺跡北側に位置する墓域1のA地区で、直径14m(以下周溝の外側の肩から)のSX01、直径8.5mのSX02、直径18.7mのSX03が検出された。墳丘はいずれも削平されており、周溝内から中期中葉の土器が出土した。周溝内側からSX01で1基、SX03で3基の埋葬施設が検出されているが、円形周溝墓に

伴うかどうか明らかでない。墓域BのM地区では方形周溝墓14基とともに同大の円形周溝墓3基が確認された。

米里遺跡は、円山川中流域、支流八木川の右岸河岸段丘上に位置する。直径9.5mを測り、墳丘は削平されていたが、周溝寄りの地点から石棺墓が1基出土した。周溝内から中期後半の土器が出土している。

#### (4) 方形貼石墓

中国山地中央部及び出雲・石見の日本海側かけての地域では、弥生時代中期から貼り石を持つ墓制が誕生し、四隅突出型墳丘墓へと系譜がつながることが考えられている。同じく日本海側に位置する近畿北部には、これらとは分布を違える墳丘斜面に石を貼る墳墓があり、これを方形貼石墓と呼称している<sup>(注5)</sup>。一辺30mを測る大型のものがあること、墳丘の周囲に溝を巡らすものが多いこと、多くは居住域に隣接して営まれることなどが特徴である。ここでは、与謝野町日吉ヶ丘遺跡方形貼石墓、同寺岡遺跡S X56、舞鶴市志高遺跡及び京丹後市奈具岡遺跡例を取り上げる。

日吉ヶ丘遺跡は、野田川右岸の台地上に位置する東西300m・南北約200mに復原される拠点的な集落遺跡である。台地先端部側が調査され、二重の環濠が検出されている。方形貼石墓S Z01は台地先端側の二重の環濠に挟まれた位置にあり、南北32m・東西20mの墳丘規模を持つ。墳丘裾には周溝があり、周溝底から墳頂部までの高さは2m以上に復原される。貼り石は墳丘斜面途中から貼られており、貼り石部の高さはおよそ1m程度である。墳頂部南寄りに埋葬施設1基のみが営まれている。墓壙は長辺5.0m・短辺3.2mと大きく、検出面から墓壙底までの深さは約0.6mである。墓壙内には長辺2.15m・短辺0.85mを測る組合せ木棺が置かれ、棺内頭部推定位置から677点の管玉と赤色顔料が出土した。なお、墳丘南側の溝を共有して方形周溝墓1基が存在する。

寺岡遺跡は野田川右岸の段丘上に位置する集落遺跡である。貼石墓S X56は、日吉ヶ丘遺跡S Z01とほぼ同規模で、南北33m・東西20mを測る。墳丘は大きく削平されており、貼り石もすべて周溝内に転落した状態で出土した。墳頂部から大小3基の埋葬施設が並列した状態で検出された。墳丘ほぼ中央に位置する第1埋葬施設の墓壙は長辺6.7m・短辺4.2mと巨大で、その中央部に棺内法2.5mを測る組合せ木棺が納められていた。第2・第3埋葬は長辺3m規模の墓壙を持ち、木棺が納められていた。各埋葬施設から副葬品は出土しなかったが、第3埋葬施設から墓壙内に破碎供献された甕が出土した。中期末頃と考えられる。なお、周辺から弥生土器を伴う溝が検出されており、方形周溝墓が存在した可能性が高い。

前述の奈具岡遺跡では、遺跡の西南部から2基の貼石墓(墓域2)が検出されている。墳

頂部が調査されておらず、不明な点が多い。

前述の志高遺跡では、居住域と旧流路を挟んだ墓域Bから3基の貼石墓および関連する石積遺構(船着場か)が検出されている。最大の2号貼石墓は、東南辺と2隅のみを確認した。東南辺は、基底部長15.5mを測り、基底部から7枚ほどの貼石を貼って高さ0.8mの墳頂部に到る。墳丘の裾部には基底部の幅約3mの周溝が巡る。この周溝を挟んで1号墓・3号墓がある。1号墓は北西斜面に2段の貼り石をもつ8m×9m規模の墳墓である。貼り石は丘斜面途中から施されている。墳頂部から並列する埋葬施設2基と土器を供献した方形土坑2基を検出した。埋葬施設SK86234は、長辺3.2m・短辺1.5~0.9mを測る墓域内から長辺2.5m・短辺0.6mを測る木棺を検出した。棺上に底部を穿孔した壺と甕を供献していた。方形土坑にはそれぞれ完形のもしくは一部を欠いた土器が供献されていた。このほか墳丘に伴う穿孔土器2点が出土している。3号墓は1号墓の南西に接続する。墳丘内から埋葬施設の可能性がある3基の並列する土坑が検出されている。

### 3. 後期の墓制との比較

#### (1) 集落との関係

中期後半の各墳墓は居住域に接続して低地や台地上もしくは近接する丘陵上で墓域が形成されているのに対し、後期の墓制では、居住域から離れた丘陵上に造墓される。ただし、前期末から中期前半に、居住域から離れた丘陵上に、墓域を求める例が見られる。

#### (2) 墳丘の区画

中期の墳墓は、周囲に溝を巡らせたり、尾根を大きく切断し、墳丘区画が明瞭である。中でも方形貼石墓は、溝で区画した上に墳丘斜面に貼り石を行い墳丘を飾るとともにその領域をさらに明確化するものである。後期の墓制に見られる墳丘区画の不明瞭な墳墓は、丹後地域に中期末に出現する。

#### (3) 埋葬施設の数と配置

中期の墳墓の墳丘上の埋葬施設は、1基のものが多いが、2~4基の複数の埋葬施設をもつものも一定存在する。七日市遺跡では、複数の埋葬施設をもつ方形周溝墓が密集する地区がある。方形貼石墓においては、最も古い日吉ヶ丘遺跡例が単数埋葬であるが、寺岡遺跡、志高遺跡では複数埋葬である。また、寺岡遺跡では中心埋葬が大型化している。奈具墳墓群では、2基の台状墓に7基のほぼ等大な埋葬施設が営まれている。埋葬施設の配置については、基本的に並列するものが多く、後期の墓制に見られる中心埋葬施設に並列・直交して囲むように配置される例はない。成人木棺墓と小児木棺墓、土器棺墓が内在するような家族墓的な性格の墳墓は丹後地域に中期末に出現する。<sup>(注6)</sup>

(4) 土器供献について

中期の多くの墳墓においては、多少の土器が出土しており、何らかの土器供献の存在が伺える。方形周溝墓の溝内埋土からは、完形に復原される土器が出土することがある。墳丘上に置かれた供献土器が転落したか溝内に供献されたものと考えられる。志高遺跡1号方形貼石墓では、墓壙内を含めた墳丘上から9点の供献土器が出土しているが、内8点では底部を穿孔したり、口縁部を欠くなど意図的に土器を仮器化しようとした形跡がうかがえる。底部を穿孔した土器は、福知山市観音寺遺跡、同岡ノ遺跡、綾部市青野西遺跡、同三宅遺跡の各方形周溝墓溝内からも出土している。墓壙内破碎土器供献の初源的な例としては中期後葉の奈具墳墓群があり、完成された墓壙内破碎土器供献は中期末に丹後地域に出現する。

(5) 武器・工具の棺内副葬について

前期末～中期前葉にかけて石鏃や石剣が棺内や墓壙上から出土する例がみられるが、継続性はなく現段階では、後期の墓制との関係は問えない。

装身具の副葬は、前期末の駄坂舟隠遺跡、中期中葉の日吉ヶ丘遺跡、後葉の舞鶴市桑飼上遺跡方形周溝墓2埋葬施設と3例存在する。日吉ヶ丘遺跡例は、頭部推定付近での面的な出土であり、玉を用いた装身具が装着状態であった可能性があり、後期の墓制に見られる玉類の出土状況と共通性が高い。

4. おわりに

近畿北部型弥生時代後期墓制の成立に当たり、丹後地域の中期の墓制が多く引き継がれた。中期後半の丹後地域には、巨大な埋葬施設や墓壙内破碎土器供献の初源的なものがいち早く見られ、中期末には、居住域から離れた丘陵上での墓域形成、墳丘区画の不明瞭化、大小多数の埋葬施設の出現、墓壙内破碎土器供献が一般化<sup>(注7)</sup>する。後期初頭には鉄製武器・工具類及び玉類等装身具の副葬が顕著になり、後期の墓制は完成する。そしてこの墓制は時期を置かずして、但馬、丹波へと広がっていく。

近畿北部の中期の墓制は、近畿中央部の方形周溝墓の影響を強く受け、山陰的な貼石墓と融合し、独自の周溝を持つ方形貼石墓が誕生している。方形貼石墓と方形周溝墓(あるいは方形台状墓)は同一集落で異なる役割を果たした可能性があること、大型墓壙から大型埋葬を中心とした複数埋葬へと移行したことは、方形貼石墓を頂点とした丹後地域の弥生時代中期社会の墓制展開を示しているように考えられる。後期になり、貼石墓という墳丘区画(墓域の霊域化)にこだわった墓制が、墳丘区画の不明瞭な台状墓へと展開することは、墓域が居住域から分離することにより、墓域としての丘陵全域が区画され霊域化され



		台状墓	方形周溝墓	円形周溝墓	方形貼石墓	後期の墓制
分布域		丹後	全域	但馬、丹波	丹後、但馬	全域
位置	立地	丘陵上	平地、台地	平地、台地	平地、台地	丘陵上
	居住域との関係	遠い/近い	近い	近い	近い	遠い
墳丘	区画	溝	溝	溝	溝	平坦面/溝
	形	方・長方	方	円	長方	不整形/方
埋葬施設	数	単数/複数	単数/複数	不明	単数→複数	複数
	大小	なし	なし	なし	あり	あり
供献土器	墳丘上	不明	あり	不明	あり	なし
	墓壇内	あり	なし	なし	あり	あり
棺内遺物	装身具	なし	あり	不明	あり	あり
	鉄製武器・工具	なし	なし	なし	なし	あり

第1表 近畿北部における弥生時代中期と後期の墓制の比較

たとえることができる。なお、後期の墓制の展開の中で、霊域として区画された墓域の中に、二重に区画された墳墓として、墳丘区画の明瞭な与謝野町大風呂南1号墓や京丹後市赤坂今井墳丘墓が出現するのであろう。

最後になるが、赤坂今井墳丘墓が築かれた後、しばらくして但馬・丹波地域で中期の墓制が復活するかのよう方形周溝墓や円形周溝墓が盛行することは、地域の墓制が密接に当時の社会を反映したものとして興味深い。

注1 「丹後の弥生王墓とその周辺－近畿北部型弥生時代後期墓制の伝統と変革－」『初期古墳と大和の考古学』石野博信さん古稀記念論集2003.12 学生社

注2 中期の丘陵上の墳墓には、ほかに京丹後市カジャ遺跡台状墓、同大山9号墳下層墓、同帯城墳墓群A10号墓が上げられるが内容に不明な点があるので検討から除外する。

注3 方形周溝墓の見つかっている遺跡には、与謝野町日吉ヶ丘遺跡、同寺岡遺跡、宮津市桑原口遺跡(後期か)、舞鶴市桑飼上遺跡、福知山市石本遺跡、同観音寺遺跡、同宮遺跡、綾部市青野西遺跡などがある。

注4 現地調査終了後七日市遺跡では、後期に方形周溝墓から円形周溝墓に変化すると考えられていたが、報告書刊行に伴う再検討により、円形周溝墓は多くが中期中葉に築かれたものと判明した。

『三万年のメッセージ 七日市遺跡と「氷上回廊」』春日町歴史民俗資料館・兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所など

注5 方形貼石墓は、次のとおり、丹後地域で8遺跡12例が但馬地域で1遺跡が確認されている。舞鶴市志高遺跡3例、与謝野町千原遺跡2例、宮津市難波野遺跡1例(現在調査中)、与謝野町寺岡遺跡1例、同町日吉ヶ丘遺跡1例、京丹後市小池古墳群2例、同奈良岡遺跡2例、兵庫

県山東町粟鹿遺跡1例。

注6 家族の概念、家族を同一墳墓に埋葬する概念についての批判を受けた上で、本稿においても、墳丘上の埋葬施設の配置から引き続き家族墓的という用語を踏襲したい。清家章氏からは親族墓的という用語についてご教示いただいている。記して感謝したい。

注7 中期末の京丹後市坂野遺跡(I期)、同左坂墳墓群18号墓にすでにこれらの要素が備わっている。

#### 参考文献

- 『七尾遺跡発掘調査報告書』(京都府峰山町文化財調査報告第8集 峰山町教育委員会) 1982.3
- 「国営農地開発事業関係遺跡平成3年度発掘調査概要〔3〕豊谷墳墓群」(『埋蔵文化財発掘調査概報1992』 京都府教育委員会) 1992.3
- 「国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡平成6年度発掘調査概要2. 奈具墳墓群・奈具古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第65冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995.3
- 『駄坂舟隠遺跡群』(豊岡市教育委員会) 1989.3
- 『志高遺跡』(京都府遺跡調査報告書第12冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989.3
- 『春日七日市遺跡-確認調査報告書-』(春日七日市発掘調査団、兵庫県氷上郡春日町) 1984.11
- 『春日・七日市遺跡(I)-第2分冊-(弥生・古墳時代の遺跡の調査)』(兵庫県文化財調査報告書第72-2冊 兵庫県教育委員会) 1990.3
- 『氷上郡春日町七日市遺跡(Ⅲ)-弥生~平安時代の調査-』(兵庫県文化財調査報告書第273冊 兵庫県教育委員会) 2004.3
- 『日ヶ丘遺跡』(加悦町文化財調査報告第33集 加悦町教育委員会) 2005.2